

加藤辨三郎 述

歎異抄

9

文責 本誌編集部



二河白道のたとえ

「念佛は、まことに浄土にむまる、たねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり。」ということは、虚心坦懐に理屈を離れ純粹の情緒の世界でわかることです。そしてこの後に、「たとひ法然上人にすかされまひらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。」とあります。仮にわたしは、法然上人にだまされ、極楽往生は必至だといわれて、それを信じたばかりに、地獄へ落ちたと

しても、すこしも後悔しません。なぜなら念佛以外の行、たとえば坐禅をするとか、題目を唱えるとかいったほかの行をして、佛になることができるというわたしであるなら、念佛したのために地獄へ落ちたということになつたら、残念で後悔するであろう。しかし自余の行、つまりわたしには念佛以外のほかの行は何もできません。何もできないといわれたのは、親鸞聖人が五十になるまで、苦勞なさった結果でありましょう。そして「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と厳しい言葉

をおおせになつてゐるのです。

このあとに「善導の御釈、虚言したまふべからず」とありますから、善導大師の「散善義」のなかにある二河白道のたとえを心に描いているのだとわたしは思うのです。

「散善義」とは、善導大師が『観無量寿経』を注釈した著書です。親鸞聖人は二河白道のたとえを、非常な感銘を受けて「教行信証」に引用されているのです。有名なたとえですから、かいつまんで説明しましょう。

ある修行者が、人なき里をとぼとぼと、西の方に向かって道を求めて歩んでいきました。ところがふと向こうを見ると、河が二本流れています。それは火の河と水の河です。とてもそれを渡ることはできません。もとへ帰ろうと思つて引返そうとすると、後ろから盗賊がやつて来て、自分の命を奪おうとしています。これはいけないと右の方へ逃げようと思つと、毒虫が押し寄せて来る。危ないとおもつて左を見ると、猛獣が来る。どっちへ向かつて、もう逃げられませんか。どっちへ向かつても死ぬしかほかに道がありません。しかし今まで道がないと思つていた前方に、よく見ると小さな白い道が見える。その道は火の河、水の河の炎と浪が押し寄せてかぶつてゐる。道が見えたけれども

渡れません。もうただ死あるのみです。そのとき後ろの方から、汝、真つすぐに行け、あの白い道を進みなさい、死なないで向こう岸へ渡ることができますよ、という声が聞こえたのです。そうかと思つと、今度は向こうの方から、そのとおりだ、汝は真つすぐにこちらへ来い、わしが守つてゐるから死ぬことはないんだと呼ぶ声があります。そこで修行者は、いわれるままに西に向かつてすすむのです。すると、さつと道を渡つて行くことができました。その西の地には、佛さまや悟りを開いた方がたがたくさんいられて、その人たちと合つて楽しい暮らしができたといふのです。

盗賊があらわれたり、毒虫が向かつてきたりするなどは、こちらの岸で、この世といふことです。後ろから声があったのは釈尊のお声で、向こうでお呼びになつたのは阿弥陀如来のお声であると善導大師は説いていられます。親鸞聖人は、これを尊いたとえ話として、そこだけを引いて書かれ、多くの弟子に配つていられます。ここでわたしどもが学ばなくてはならないのは、ただ死があるのみ、ということ。要するに逃げ場所がない。これは大変にいやなことです。が、実際にはこういう思いをすることがあるのです。

わたしも学生時代に病気をしました。今までは、自分は

健康だと思っていました。思いがけなくも高熱を出して入院したのです。しかも死んだら遺体を自由に解剖してもよいという誓約書を出され、それに判を押しました。この誓約書のため無料で治療して貰えるのです。それはともかく、死ぬやもしれないということに直面しました。そこへあいにく、中学の同級の親友が、別の学校へ入学し、将来を夢に見て胸を膨らまして勉強をしていたのですが、結核でポツカリと亡くなってしまいました。目の前で、忽然として親友が消え失せたのです。わたしは何ともいえぬ思いに沈められました。それから、生とは何ぞや、死とは何ぞや、何のために生きなければならぬのだ、何のために勉強しなければならぬのだ、待っているのは死ではないか、どの道、死ぬのに決まっているのなら、なぜ生きていなければならぬのか、そんな結論が決まっていれば、さっさとしかるべく自決したらいいのではないか、いわゆる迷いというより懊悩、一種の不安といえます。そんな時期が約半年ほどありました。

そこで、このままではいけないから、佛教書を読もうと、たまたま見つけたのが、金子大榮先生の「佛教概論」という本でした。それがご縁で金子先生が、わたしの師になっ

てくださったようなわけがあります。しかし、死ぬのになぜ勉強しなくてはならないかと、青年らしい煩悶をしたということも、よく考えると、どっち向いて見ても死しかないというせっぱ詰まったところへ落ちたときなのです。そしてそこに初めて白道が見える、念佛の一道が見えてくるのです。そして声が聞こえてくるのです。

よき人の仰せ

わたしの知り合いに、そういう経験をした人がずいぶんいます。戦争に行った人なんか、どうにもならなくなったとき、それまで念佛を称えたことがないのに、なんまんだぶつといって称えた。ある人は、雷が大嫌いだ。道を歩いていて雷がやってきて、ピカッ、ゴロゴロ、思わず何かの下へ入って、なんまんだぶつを称えたという。これはまた、ずいぶん卑近なことですが、それだつてその人にとっては実感なのです。それまでは、念佛なんてわけがわからないといっていました。しかしその人は、雷が縁で爾来、念佛のなかにはいり、いま念佛一本になっています。そういう具合で、念佛は自分の力でどうにもならないことを自覚させてくれるのです。また、そのときに、ただ念佛ということも自覚させられるのです。自分が念佛を称えるのではなく、

向こうからそうさせていただくのです。煩惱熾盛、罪悪深重も、どうにもならないという自覚です。煩惱は煩惱で出てきます。罪悪はもちろんしたくはないが、業縁がもよおせば、どんな罪悪を犯すかわからないことを自覚させられるのです。これがその人の実際の体験であろうと思うのです。

親鸞聖人も、ご自身の体験から、「いづれの行もをよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」という鋭い言葉を語られたのでありましょう。何の行をしてみても、わたしは落第だと自覚させられました。その自覚の境地を、地獄は一定すみかぞかし、こういうお言葉で仰せになったではありませんか。

さてそこで、今度は一転し「弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず」とあります。はじめてここを読んだとき、わたしは、非常な飛躍を感じました。それはわたしに「弥陀の本願まことにおはしまさば」ということが、わからなかったのです。なぜかということ、貧弱な頭でありながら、知識的に「弥陀の本願とは何ぞや」というからわからないのです。それがわかる方は「とても地獄は一定すみかぞかし」の自覚のできた人です。それでもないまは弥陀の本願というのは、真実の道理が説いてある

ことと本当に信じています。弥陀の本願は真実の教え、そしてこれが佛の大慈悲心の具体的なあらわれだと信じさせられているのです。

弥陀の本願は、先ほどのよきひとの仰せという言葉と関連があり、阿弥陀如来のよき言葉であると受け取らせていただいています。弥陀の本願は、せんじ詰めれば如来の仰せであります。

その仰せを素直に聞き取られたのが釈尊であります。釈尊は、その受け取った道を、「大無量寿経」「観無量寿経」「阿弥陀経」の三つの經典に説いて、阿難尊者らの弟子たちに教えてくださったのです。ですから浄土三部経は、釈尊から見るとよきひとの仰せが聞こえたのです。それが真実の道理であると受け取れました。あらゆる罪悪深重、煩惱熾盛の者も隔てなく、一如平等に佛の世界、悟りの世界へ入れることができるというその願い、それが弥陀の本願にはかならないのです。

したがって、その釈尊がうそをついているわけではない。それは阿弥陀如来の仰せをこうむって説法をなさっているのだから、うそをおつきになるわけではない。

釈尊の仰せにうそがないことならば、釈尊の説かれた観

無量寿経を詳しく勉強した善導が、ただ本願を信じ念佛も
うせ、そうすれば間違ひなく往生ができるとお説きになっ
た言葉にうそはないのです。

その善導大師の教えに偏えに依っているのだと仰せになっ
ている法然上人のお言葉にもうそはないのです。法然上人
の教えがまことであるなら、わたしが言っていることもう
そではないはず。なぜならわたしは、法然上人の仰せをこ
うむって、念佛によって、弥陀にたすけられまいらすべしと
信じ念佛を称えているのですと、親鸞聖人のお言葉です。

こうして弥陀の本願まことにおわすということが、わた
しにも、おのずから信じられてくるのです。それもよきひ
とに会ってお話を聞いているうちに、頑固な理屈が消えて、
弥陀の本願まことにおわしますことが、本当に信じさせら
れてきて念佛を称えるようになりました。

この大もとは、阿弥陀如来が、わが名を称えよ、そうすれ
ば必ずお前はわが国に生まれることができますと仰せになら
れた、それが往生の約束なのです。わが国に生まれること
ができるとは、悟りが開けることで、お前が悟れなければ、
わたしも成佛しないと仰せになる。お前が悟ればわたし
も佛になるといふ如来の大慈悲心です。要するに如来の慈

悲心は、われわれ衆生にすべてをかけていられるのです。

だから、ここに「愚身の信心にをきては、かくのごとし」
とあります。愚かな身、すなわち自分のことですが、特に
身というのは、体でそうお受け取りになっているのです。
わたしはこう受け取っている、だから、あなたたちは、わ
たしの言うことを取って念佛を称えてくれるか、あるいは
捨ててしまいか、それはわたしにはどうにもならないこと
だ、あなたたちは、あなたたちの体で受け取らせてもらわ
なくては仕方がないのだ、あなたたちの相手は如来である
のです、と行って親鸞聖人は、泣いて突っ放していられる
ような感じがします。

宗教は自分の問題にならなければ駄目です。第三者とし
て、批判の立場にあつて論じていても、なんにもなりません。
念佛論とか本願論とかすばらしい本を書かれても、念
佛を称えないで論じている。それでは第三者の思想なので
す。本願を信じ念佛もうす世界は、めいめいの自分の世界
です。そこへ入らなくては、どうにも仕方がありません。
だから「このうへは、念佛をとりて信じたてまつらんとも、
またすてんとも」みなさんのご勝手だと言いたくなるので
す。

(前在家佛教協合理事長・元協和醱酵工業社長)